京都新聞



# 日本人の忘れもの

## 京都、こころ ここに

# 京は日々の暮らしに息づく

戦後、日本人が置き去りにしてきた大切な心を見直す京都新聞「日本人の忘れもの」記念フォーラムin東京（日本人の忘れものキャンペーン推進委員会主催）が5月14日、東京都千代田区・内幸町ホールで開かれた。森清範・清水寺貫主が基調講演で東日本大震災を例に日本人の宗教観を説いたあと、武者小路千家家元夫人の千和加子さん、桑原専慶流副家元の桑原櫻子さん、秦家主宰の秦めぐみさんの3人が、京の伝統や暮らし方などについて語りあった。コーディネーターは京都新聞総合研究所特別理事の吉澤健吉がつとめた。

本社キャンペーン「日本人の忘れもの」は今週で第1部を終了、来週から装いを新たにして第2部を毎週日曜に掲載します。

写真は右から武者小路千家家元（京都市上京区）、桑原専慶流家元（京都市中京区）、秦家住宅（京都市下京区）

### 基調講演 森 清範 清水寺貫主

もり・せいはん 1949年、京都市生まれ。15歳で得度、花園大卒業後、清水寺真福寺住職などを歴任。88年、清水寺貫主・北法相宗管長に就任。「人のこころ」「観音の心」など著書多数。

## 今を生きることが未来をつくる

世界遺産・清水寺は778年に創建されたと伝わります。『枕草子』『源氏物語』『平家物語』などの古典文学にもたびたび登場し、平安時代初めにはすでに大衆信仰の名所としてにぎわっていたことがうかがえます。

ことわざで有名な「清水の舞台」は観音様に舞楽を奉納したのき舞台に立つ」という言葉はここから生まれました。舞台周辺を修学旅行生がよく走り回っていますが、お寺のたたずまいを感じ、空気を吸って帰るだけでも、子どもたちには日本の文化を体感する貴重な体験となるでしょう。

清水寺には三重塔があります。塔というのはじくなった人を供養する建築物です。仏教は本来、「生きているときに信仰を開いた人が仏になります。ところが仏教が伝来した当時、日本には人も死ぬと神になるという神道の考え方がありました。現在、日本では、クリスマスを祝い、除夜の鐘をついて正月を迎える人が少なくありません。人が死ぬと仏になるという宗教観は、日本人の寛容な宗教態度の表れです。仏教で「亡くなった人の冥福を祈ること」は、生きている人に心の安らぎを与えてくれます。地球上の生きとし生けるものが皆つながっているのと同時に、亡くなった人とも結ばれているということです。日本漢字能力検定協会が公募し、2011年の世相を表す漢字として選ばれたのは「絆」でした。私が筆で書くのをテレビでご覧になった方も多いと思います。「絆」の英訳は「bond」には「接着する」という意味があります。絆創膏という言葉もありますね。興味深いことです。

東日本大震災の大津波で流された宮城県陸前高田市の松の木を使った大日如来坐像の制作を京都・高田市の松を使った大日如来坐像の制作を京都・高田市の大津波で流された宮城県陸前高田市の松の木